

## 端午の節句（たngoのせっく）

端午の節句<sup>\*</sup>は、5月5日にあたり、菖蒲<sup>しょうぶ</sup>の節句ともいわれます。また、菖蒲を尚武（しょうぶ）という言葉にかけて、勇ましい飾りをして男の子の誕生と成長を祝います。

※節句=1年のうち、季節の変わり目に、願いを込めてお供え物などをする行事。  
 人日<sup>じんじつ</sup>の節句（1月7日）、上巳<sup>じょうし</sup>の節句（3月3日）、端午<sup>たんご</sup>の節句、七夕<sup>しちせき</sup>の節句（7月7日）、  
 重陽<sup>ちゅうよう</sup>の節句（9月9日）の5つがあります。

## 〈鯉のぼりと武者絵のぼり〉

鯉は、とても生命力の強い魚です。また、鯉が急流を登ると竜<sup>りゅう</sup>となって天を登るという中国の伝説にちなんで、子どもの立身出世を願って江戸時代ごろから「鯉のぼり」が飾られるようになりました。

地域<sup>ちいき</sup>によっては、鯉のぼりといっしょに「武者絵<sup>むしゃえ</sup>のぼり」を立てます。勇ましい武者<sup>むしゃ</sup>が描かれた武者絵のぼりも、子どもの健康と成長を願って立てられるものです。

栃木県内でも作られてきました。なかでも、市貝町<sup>おおいた</sup>の「大畑家の武者絵のぼり」、佐野市の「佐野武者絵のぼり」は、県の伝統工芸品となっています。



## 〈鯉のぼりを上げてはいけない里がある〉

「平家の落人伝説」で有名な日光市湯西川<sup>ゆにしがわ</sup>地区。昔、戦に敗れて逃げた一行<sup>いっこう</sup>が、男の子の誕生を祝い鯉のぼりをあげたところ、追っ手に見つかりひどい目にあったとの言い伝えから、現在もこの地域では鯉のぼりをあげない風習が残っています。

## 〈端午の節句の説明〉

端午の節句は、奈良時代から続く古い行事です。

もとは月の端<sup>はしめ</sup>の午<sup>うま</sup>の日という意味で、5月に限ったものではありませんでしたが、午〔ご〕と五〔五〕の音が同じなので、毎月5日を指すようになり、やがて5月5日のことになったと考えられています。

この日は、厄<sup>やく</sup>をはらう菖蒲<sup>のきさき</sup>を家の軒<sup>のきさき</sup>先<sup>のきさき</sup>につるし、湯<sup>しょうぶ</sup>に入れて菖蒲湯<sup>しょうぶゆ</sup>にして入浴<sup>にゅうよく</sup>しました。

江戸時代になると、菖蒲と尚武<sup>しょうぶ</sup>をかけて、身を守る鎧<sup>よろい</sup>や兜<sup>かぶと</sup>を飾り、こいのぼりを立てて男の子の成長<sup>りっしんしゅつせ</sup>や立身出世<sup>りっしんしゅつせ</sup>を願ってお祝いをするようになりました。